

刺客列伝「荊軻」の「秦王環柱而走」をどう読むべきか ―高校教室からの疑問点―

安立典世

燕の太子丹の密命をおびて強国秦に潜入し、秦王政の命を脅かした荊軻。そのドラマチックな人生は、色とりどりの英雄たちがひしめく『史記』の中でも、ひときわ激烈な光を放っている。高等学校の古典の教科書にしばしば採録され、二千年後の日本の生徒たちの胸を打つ貴重な教材である。筆者もこの教材を何度か扱ったが、扱うたびに古典の持つ偉大な力を再確認させられる。普段は漢文に拒絶反応を示す生徒たちも、いつしか荊軻の運命を自分に引き寄せて、作品の中に入り込んでいく。授業中、八十個の瞳が吸い付くように一斉に前を向く瞬間がある。現代の生徒たちにも「ある何か」が確実に伝わっていることを実感する。人間の生き方は無数にあるが、その最も壮絶なものの一つがここにあるからだろう。

さて、荊軻伝の中で、生徒たちが特に引きつけられるのは、何と言ってもクライマックスである。地図から匕首が現れ、それをつかんだ荊軻の最初の一撃が、それで秦王の袖を断ち、その後、秦王が逃げまどう部分である。筆者はこの場面にしばらく前から一つの疑問を持っている。以下に原文及び書き下し文をあげ、その疑問点を示していきたい。

秦王發函、函窮而匕首見。因左手把秦王之袖、而右手持匕首搃之。未至身、秦王驚、自引而起、袖絕。拔劍、劍長操其室。時惶急、劍堅、故不可立拔。荊軻逐秦王、秦王環柱而走。群臣皆愕、卒起不意、尽失其度。而秦法、群臣侍殿上者不得持尺寸之兵。諸郎中執兵皆陳殿下、非有詔召不

得上。方急時、不及召下兵、以故荊軻乃逐秦王。而卒惶急無以擊軻、而以手共搏之。是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也。秦王方環柱走、卒惶急、不知所為、左右乃曰、「王負劍！」負劍、遂拔以擊荊軻、斷其左股。荊軻廢、乃引其匕首以擣秦王、不中、中銅柱。秦王復擊軻、軻被八創。軻自知事不就、倚柱而笑、箕踞以罵曰、「事所以不成者、以欲生劫之、必得約契以報太子也。」於是左右既前殺軻、秦王不怡者良久。(底本：中華書局標点本『史記』)

秦王凶を發ぎ、凶窮まりて匕首見はる。因りて左手に秦王の袖を把り、右手に匕首を持ちて之を搥す。未だ身に至らず、秦王驚き、自ら引きて起ち、袖絶ゆ。劍を抜くも、劍長く、其の室を操る。時に惶急し、劍堅く、故に立ちどころに抜くべからず。荊軻秦王を逐ひ、①秦王柱を環りて走る。群臣皆愕き、卒かに起ること意はざれば、尽く其の度を失ふ。而して秦の法、群臣の殿上に侍する者尺寸の兵を持つるを得ず。諸郎中兵を執りて皆殿下に陳し、詔召有るに非ざれば上るを得ず。急なる時に方たり、下の兵を召すに及ばず、故を以て荊軻乃ち秦王を逐ふ。而れども卒かに惶急して、以て軻を撃つ無くして、手を以て共に之を搏つ。是の時侍醫夏無且其の奉ずる所の藥囊を以て荊軻に

提つ。②秦王方に柱を環りて走る。卒かに惶急して、為す所を知らず、左右乃ち曰はく、「王劍を負へ！」と。劍を負ひ、遂に抜きて以て荊軻を撃ち、其の左股を斷つ。荊軻廢し、乃ち其の匕首を引きて以て秦王に擣つも、中たらずして、③銅柱に中たる。秦王復た軻を撃ち、軻八創を被る。軻自ら事の就らざるを知り、④柱に倚りて笑ひ、箕踞して以て罵りて曰はく、「事の成らざる所以の者は、生きながらにして之を劫かし、必ず約契を得て以て太子に報ぜん」と欲するを以てなり。」と。是に於いて左右既に前みて軻を殺し、秦王怡ばざること良久し。

傍線をつけた部分は、「柱」が出てくる部分である。それほど長くない文章の中に、四箇所も登場している。特に最初の二つは、「秦王環柱而走」「秦王方環柱走」とほぼ同じ表現が繰り返される。だが、この「柱を環りて走る」についてどのような解釈があるかという点、実は一定していない。手に入りやすい解説書を見ても、ここの解釈がいろいろある。

岩波文庫の『史記列伝(二)』(小川環樹・今鷹真・福島吉彦 一九七五年)は、①を「秦王は柱をまわつて逃げた」、②を「秦王はなお柱をまわつて逃げまわつた。」と

解釈している。筑摩書房の『世界文学大系 史記』（小竹文夫・小竹武夫 一九六二年）では、①を「王は柱をめぐって走った」、②を「秦王はなお柱をめぐって走り、おそれて為すところを知らなかった。」と訳している。その他、明徳出版社の『中国古典新書 史記』（福島中郎 一九七二年）や平凡社の『中国古典文学大系 史記（中）』（野口定男 一九六九年）、朝日新聞社の『中国古典選 史記 春秋戦国篇』（田中謙一・海知義 一九六六年）、大修館書店の『史記の事典』（青木五郎・中村嘉弘 二〇〇二年）などをみてみたが、どれもほぼ同様の解釈であった。

一方、明治書院の『新釈漢文大系 史記列伝二』（水沢利忠 一九九三年）は、①を「秦王は柱をめぐって逃げる」、②を「秦王はなおも宮殿の柱列の間をめぐって夢中で逃げ続けていた」（傍線は筆者）と訳出している。

なお、この場面は『十八史略』春秋戦国にも採られているため、参考のために確認してみた。『史記』で二回登場した「環柱」は「十八史略」では一回になっている。原文は「軻逐之、環柱走。」すると、角川書店の『鑑賞中国の古典 十八史略』（竹内弘行 一九八九年）は、「荊軻は追った。（宮殿の）柱を巡って追いつ追われつになつた」、明治書院の『新釈漢文大系 十八史略上』（林秀一 一九

六七年）は、「軻は王を追いかけた。二人は柱の周囲をぐるぐる走り廻った。」と解釈していた。

このように比較してみると、一つの疑問がうかびあがる。果たしてこの「柱」は「一本の柱」なのだろうか、それとも「複数の柱：柱列」なのだろうか。

『新釈漢文大系 列伝二』には、「柱列」とはつきり書いてあるものの、その他の解釈では、柱の数や状況は明らかにされていない。秦王が逃げまどつたのが、「柱列の間」とするのと、「一本の柱」と考えるのでは、読み取れる光景が大きく異なってくるのではなからうか。

三

この問題を考えるあたって、いくつかのアプローチを試みた。まず、『史記』の代表的な注釈である三注ならびに『史記会注考証』を確認したが、「環柱」については、特別な記述はない。『史記会注考証校補六』（一九五九年）には、『校刊史記集解索隱正義礼記』が引用され、「旧刻秦王字不重。疑是。蓋此時軻与秦王皆環柱而走也。（旧刻秦王の字重ねず。疑ふらくは是れならん。蓋し此の時軻と秦王とは皆柱を環りて走るなり。）」という記述があるが、柱の周りを荊軻と秦王の二人がめぐって逃げた、と当たり前のこと

が書いてあるだけで、これも柱の状況の答えにはなっていない。今日の一般的な訓読の基になったという江戸時代の和刻本『史記評林』八尾版は「柱ヲ環テ」と読んでおり、また、明治初年に出た鶴牧版も、「環柱」を「柱ヲ環テ」と読んでいる。だが、ここからも有力な手がかりは得られない。王利器の『史記注訳三』（新華書店 一九八八年）はこの部分を「秦王繞着柱子跑」と訳している。やはり、柱の数は明確ではない。

次に「環」の字義から考えてみた。主立った辞書の解釈をひろつていくと、『王力古漢語辭典』には、「玉器、円形、中心有孔。引申為円形的東西。如指輪、耳輪、臂輪。引申為動詞、環繞。（玉器、円形で中心に孔がある。そこから円形の物をいう。指輪、耳輪、腕輪など。動詞としては、まわりをめぐるの意。）」とあり、円形の玉器からの派生義として、環繞を説明しており興味深い。『漢語大詞典』第四卷には、「旋転（ぐるぐる回る）、囲繞（まわりを取り囲む）」などの意味を載せる。『漢語大字典』第二卷では、「環繞」（まわりをめぐる）、「囲繞」（まわりを取り囲む）の項に荆軻伝の「秦王環柱而走」の部分を引いている。

江戸時代の、荻生徂徠『訳文筌蹄』には、「環」について、「タマキト云フ字ナリ、ワノヤウニナルコトナリ、故ニメ

グルトヨムトキモマワリヲ一遍クルリトマワルコトニ用ユ」とある。また、伊藤東涯の『操觚字訣』には、「環ハ囲繞ナリ、・・・ワニナルコト也。」とある。同書には、「旋ハ、イクメグリモヒタモノ、キリキリトメグルコト也」との解釈も見え、何周もぐるぐる回る「旋」と一周する「環」とを区別している。

以上をまとめると、「環」は、ぐるりと一回りする、輪を描いて回るといふ様子を示した字であると言えよう。そこに「旋回（ぐるぐる回る）」というニュアンスを含むかどうかは、解釈が分かれるところだが、一般的なイメージとして、「環柱」は、一本の柱の周囲を丸く円をかいてまわることだと見た方が、より字義には近いように考えられる。だが、上述の解釈の揺れともあいまって、何本もの柱が並んでいるところをぐるりと一巡りすると読むことも可能で、ここからもやはり柱の数や状況は決めがたいようである。

今度は、秦の宮殿の構造を見ておきたい。この時、秦王政は咸陽宮にいた。はるか昔に失われた咸陽宮については、研究、発掘の途上で、その全容は明らかではない。が、一部の建物について、図1、図2のような構造であったとの報告がある。

これらの図を見ると、多くの円柱が天井を支える形であつたことは疑いなく、宮殿中に円柱が林立していた。一方、二階の図には大きな柱が中央にあるのも見え、構造上からは、「柱列」と「一本の柱」のどちらも状況としてはありうると考えられる。

四

さて、上記の考察をまとめれば、ここは「一本の柱」とも「柱列」ともどちらにも決められない、というのが結論になるだろう。逃げるスピード感を読み取るのであれば、もちろん柱列が望ましいし、宮殿の造りからしても居並ぶ柱をぐるりと一回りしながら逃げている構図はいかにもダイナミックで、緊迫感がある。豪華な秦の宮殿の様子も彷彿とされ、荊軻伝のクライマックスにふさわしい場面になるはずだ。

だが、教室の中で、筆者はあえて「一本の柱」と読み解いた。というのは、この暗殺の場面で、「柱」は舞台の小道具として効果的に使用されているからだ。柱列として、複数の柱に視点が次々と移動するのではなく、スポットライトが当たったがごとく、一本の柱に読者の視線を釘付けにするために、「柱」は意図的に使われていると考えたの

である。

この柱は、当然宮中の心臓部にある柱であるから、現在の紫禁城の玉座の周りにあるような、直径が一メートルを越すほどの巨大な柱であつたと考えられよう。その一本の柱の表をまわり、裏をまわり、秦王は必死で逃げた、荊軻は夢中でそれを追いかけた、こう読み取れはしないだろうか。

秦王の周章狼狽ぶりをアイロニカルに表現するためにも、柱は一本でありたいのである。あの冷酷で残忍な秦王政が、こまねずみのようにぐるぐると同じところをまわっている。これほど秦王の逼迫を描ききった演出はなかるう。極悪非道な秦王が小動物のごとく、みじめに追い立てられる滑稽な姿と、一撃必殺の匕首を持って秦王をここまで追いつめた英雄荊軻の気迫が、あざやかに対比されはしないか。

また、周囲のものが全く手をだせずに、この大惨事を見つめている様子も際だつてくる。一本の柱を荊軻と秦王が円を描いてまわる。そして一段下がった場所で、家臣たちが一本の柱を凝視している。二重三重四重の人間の「環」が、暗殺者と王を取り巻いている。秦の法律が立ちただかつて、部下たちはただただ棒立ちになつてその様子を見守ることしかできなかった。まさに「衆人環視」という言葉

そのまま、荊軻の暗殺は達成されようとしたのだ。

ここで、宮崎市定氏の説を援用させていただく（傍線は筆者）。

これは語り物を写したのであって、語り手が身振りを混えて、時に太子丹になり、時に田光先生となり、時に荊軻となつて、観客の前で演出した言葉を書取つたものである。……身振りの演出を伴う語り物であるから形成逼迫した有様を写す時は必然的に、合いの手が入る。……時（卒）惶急の三字が三度繰返されているが、これは正しく相撲の行司の、「残つた！残つた！」に相当する。オリンピック競技なら、「がんばれ！」でもよい。（身振りと文学―史記成立についての一試論）

『中国文学報』二〇冊 一九六五年

司馬遷は友人に董仲舒があり、董仲舒は侍医の夏無且と親しかつたので、荊軻事件の一部始終を聞いて司馬遷に話した。……ところで、そんなら司馬遷の書いた荊軻伝は悉く確実な拠り所があつて、総てを実録と信じて良い

か、という段になると話は違う。私はやはり全体が一種の語り物、それも身振り、手振りを雜えた演出の筋書に外ならぬと考える。……荊軻が秦王を追いかける段も、いかにも迫真のように見えて、実は演劇の立廻りに近い。匕首の白刃を背に感じながら、長剣を肩越しに引き抜くなどは、真剣勝負の実況とは思われない。さればと言つて此等の場面は、演出の見せ所であるから、総て取り去つてしまつては興行価値がなくなつてしまう。史記の原文には、荊軻が秦王を追いかける叙述の中に、時惶急、卒惶急という三句が挿まれている。私の考えではこれは、がんばれーと言うような合いの手であつて、観衆の方が唱和して叫んだ掛け声に違いないと思う。

（岩波新書『史記を語る』一九七九年）

宮崎氏は荊軻伝全体が、「語り物」を写した特徴に満ちているといい、観衆の前で、語り手が身振り手振りをを用いてこの話を演じたのだと結論づける。氏の説に則れば、この「秦王環柱而走」の部分でも、語り手は秦王と荊軻のまねをして、ひらりひらり身を翻し、くるりとその場を円を描いて回つたに違いない。「秦王環柱而走」は二度書かれている⁽³⁾。あいだに秦の法律の説明を差し挟みながら、語り

手は荊軻となり、秦王となつて同じ動作を繰り返しつつ、熱演していたのではなからうか。そうすると、「環」の字義が「輪をかいてひとまわりする」という点もよく理解できさる。一本の柱をまわつて逃げていたとするなら、何周も柱の周囲をぐるぐる回つていたはずである。むしろ「旋」の字を用いた方が、状況を表す言葉としては適切だ。だが、ここに「環」という字が二度とも用いられ、「環」が表す字義が「ひとまわり」というのなら、次のように考えられるだろう。

語り手は最初に「①秦王柱を環りて走る。」で、ぐるりと一周、そして夏無且の動きを説明した後、秦王が今だ逃げてゐるのを強調するために、「②秦王方に柱を環りて走る。」と、再びぐるりとその場を一周したのである。「環」は、まさに語り手の動き、そしてその息づかいを映す言葉であつたのである。また、あくまでも想像の域を出ないが、柱の小道具を舞台に置いて、実際にその周囲をまわつて演じていたとも考えられよう。この場面を演劇としてとらえれば、観客たちも芝居の一員として、時に秦の部下として見立てられ、時に荊軻の応援団として叫び声をあげながら、ぐるりと柱を取り巻いて、この場面に熱狂したことであらう。

この後、「剣を背負つた」秦王は、振り向きざまに刀を抜いて、荊軻の左股を断つ。この瞬間、「環」の動きは断ち切られる。しかし、荊軻は最後のあがきとして持つていた匕首を投げつけた。そしてそれは銅の「柱」にあたる。ここでも「柱」は重要な小道具として機能している。そして、最後、この話のクライマックスとなる荊軻の笑いは、以下のように表現される。「軻自ら事の就らざるを知り、柱に倚りて笑ひ、箕踞して以て罵りて曰く……」立てなくなつた荊軻は両足を投げ出して座り込んだ。そして、まさに「柱」にもたれかかつて、いまわの呪いを秦王に投げかけたのであつた。

さらに、よく教科書に載せられている後漢の武梁祠画像石にも触れておきたい。画像石であるから、石に彫刻するという技法上、構図上の制約もあるのであるが、一本の柱をはさんで、左右に秦王と荊軻が描き分けられている(図3)。史実はどうだったにせよ、この場面が語られるときに、人々が「一本の柱」をイメージしてきたことの一つの証左になるであろう。荊軻伝は人気の出し物(演劇)だつたはずである。あまたある英雄談の中から、この場面が取り上げられ、こうした画像石の題材となつてゐることからだけでも、十分にそれが伺えよう。

荆軻伝において、秦王政の暗殺場面は、すべて一本の柱の周りで演じられた。柱は暗殺場面の小道具として重要な役割を担っていた。一本の柱は暗殺のまさにその瞬間を劇的に描き出し、匕首と共に荆軻の無念を抱きかかえて、舞台は幕を降ろすのであった。

五

さて、上述の解釈は、そもそも『史記』を史実として読むという立場には全くない。演劇として、語り物としての面白さ、という点においてのものであることを強調しておきたい。古代の語り手が演出して見せたその「荆軻伝」のクライマックスを、筆者は現代の教室でシミュレーションしてみた。教卓を柱に見立てて、生徒一人を秦王、一人を荆軻にしてぐるりぐるり。そうすると秦王が剣を背負って抜き、その剣が左股に当たる様子が、舞台上で演じると実に自然で、よく計算されていることに気づく。一本の柱の周りを回っているせいで、体が柱に密着し、右肘が柱に当たって力も入らず、左手にある剣はなかなか抜けない。そこで、剣を背負って右肩側から抜く⁵⁾。そうすると振り向きざま、一番先に切っ先が届くのは荆軻の左足である。(このように考えるとこの瞬間は、柱を時計回りに回っていた

と考えるのが妥当のようである。)左足をやられて、右側にある柱にもたれかかる荆軻の動きにも、タイミング的に無駄がない。真に良くできたシナリオである。まさに語り手の思っかいを感じる。大変おこがましいことだが、筆者なりの脚本を以下に示そう。

(語り手) 秦王と荆軻は柱をまわって追いつ追われつになつた。

(秦王と荆軻) 柱を一周

(語り手) 急なことで、部下はあつげにとられるばかり。

秦の法律では、上段の間では武器が持てない。下段に控える兵士たちは命令がなければ上れない。荆軻は誰にも邪魔されず、夢中で秦王を追いかけている。さしもの秦王も慌てふためいてどうしてよいやらわからない。剣を抜こうにも、柱にあちこちが当たって、上手く抜けない。その時だ、侍医夏無且が葉袋を投げつけた。見れば、秦王はまだ柱をまわって逃がっている。

(秦王と荆軻) 再び柱を一周。

(荆軻) 葉袋にあたつてバランスを崩す。

(家臣) 「王様。剣を背負いなされ。」

(秦王) 剣を背負ってふりかぶる。剣はぬけ、振り向きざ

ま荆軻を撃つ。劍は一直線に左股を切り裂いた。

…演技者はここまで、スピーディーに…

(荆軻) 倒れる。…一転スローモーション…

倒れざま、匕首を投げつける。

(秦王) すばやく身を柱の陰に隠す。

(語り手) 匕首は秦王に当たらず。

むなしく銅柱に匕首は刺さる。

(秦王) 反撃。めちやくちやに荆軻を斬りつける。

(荆軻) 柱に寄りかかり笑い。狂ったようにゲラゲラ。

表情急変、吐き出すように怒鳴る。

「俺が失敗したのは、おまえを生かしておいて脅

迫し、いろいろな約束を取り付けて、太子丹の鼻を

あかしたかったからさ。」

(秦王) 荆軻にとどめを刺し、エンディング

六

柱一本の表裏に秦王を迫いつめていながら、暗殺失敗に終わった荆軻の無念…。生徒たちは、この教材を読み終えると、「本当にあと少しだったのに。もし荆軻が暗殺に成功していたら、歴史は変わっていましたよね。」という。筆者はいつも、「その感想は、この話の最後にも書かれて

いるよ。荆軻がもう少し剣術を学んでいたら、暗殺が達成できたのに、って悔しがって感想を述べている人がいるよ。それから、この感想を載せてあるっていうことから、司馬遷自身が荆軻を惜しんでいたことが伝わるね。君たちは、二千年以上昔の人たちと感覚を共有できたんだよ。」と答える。

また、「荆軻は太子丹を快く思っていないかっと思いましたが、結局暗殺に赴いたのは、なぜでしょうか？成功しても失敗しても絶対殺されるのに・・・」とも聞く。筆者は「田光先生が存在が大きかったのかもね。荆軻に暗殺を決意させるために自ら首をはねた。荆軻はその瞬間に、自分の命に何百何千の人間の命がのしかかっていることを知ってしまったのではないかしら。荆軻の無念は何百何千の人間の無念と重なっているんだね。」と答える。

生徒たちの思いは、はるか昔に語り物としての荆軻伝に拍手を送った人たちの感想とも重なってくるのだろう。一つの約束を果たすために、命を燃やし尽くす暗殺者。ことの善悪はともかく、その姿は文句なく貴く格好良い。人は何のために生まれ、何のために生きるのか…古今突きつけられてきた問いを、読むたびに新たにすると。そう思うと古典を読むということが、何千年もの間の人々の思いのり

レーであることを思い知らされる。そうであればこそ、私たちは古典を読むことを決してやめてはならないのだ。

高校の古典の授業の役割は、生徒を古典の入り口に連れてくることだと筆者は考えている。確かに漢文は生徒たちにとつて、漢字ばかり並んでいて、頭の痛くなることばかりであろう。しかし、ひとたび読んだその先には、イメージ豊かな、そしてダイナミックな世界が広がっている。今回試みた解釈も、生徒たちのイメージを喚起するための一つの方策である。たつた一つの文字にこだわることだけでも、様々なイメージが浮かび上がる。古代の語り手たちの迫真の息づかい、そしてそれをくみ取った司馬遷が、一文字一文字に込めた豊かなイメージを、現代に生きる生徒たちにひとしずくでも多く感じてもらいたいと思う。

授業を通して、生徒たちに「ある何か」を伝えたい。もちろん、「ある何か」を一介の高校教師が語り尽くせるはずもない。しかし、その「ある何か」のわずかな片鱗であっても、それが次の古典の世界に生徒たちを誘う原動力になることをいつも願っている。

注

(1) 「環柱」に関して、『史記』のテキスト間における文字の異動はない。だが、この部分、『史記』荊軻伝と『戦国策』燕策は、ほぼ同様の文章で成り立っており、『史記』の文章がそのまま『戦国策』に引き写された等々の見方がされている。『戦国策』では「環」を「還」に作っている(注に字義は同じとある)。

(2) 陶復「秦咸陽宮第一号遺址復原問題的初步探討」(『文物』一九七六年第一期)

(3) この繰り返しの多さも、語り物の特徴であるという。文字にするとうるさい繰り返しも、耳で聞く分にはそれほどでもない、と宮崎氏は述べている(前掲「身振り」と文学)。

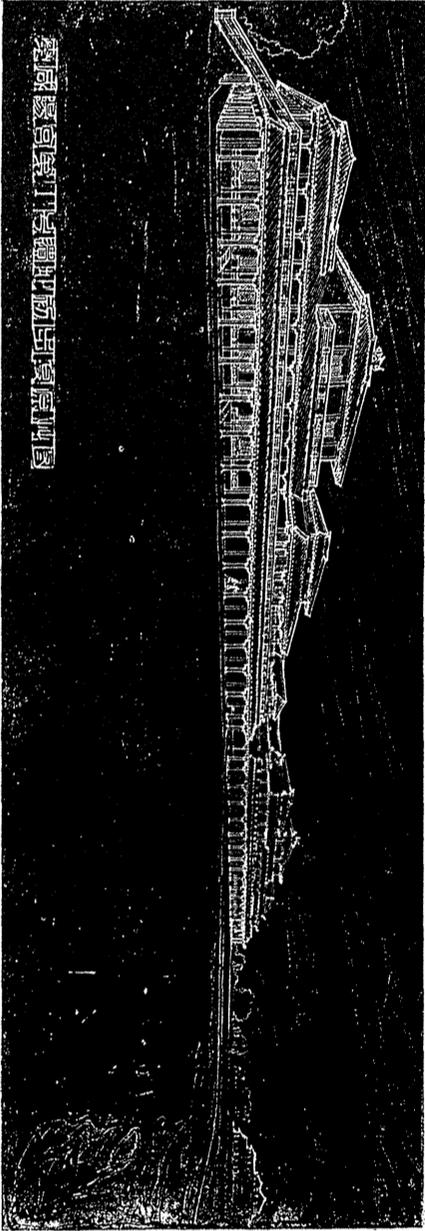
(4) 『金石索』による。大修館書店より図版を提供していただきました(精選「古典」)。

(5) 『史記雕題』には、「負剣者以劍堅不可拔也。負則用力全而易拔耳。非長短之謂。」(劍を負ふは、劍堅くして抜くべからざるを以つてなり。負へば則ち力を用ふること全くして抜くこと易きのみ。長短の謂ひに非ず。)とある。全力で劍を引き抜くために劍を背負つたとする解釈である。

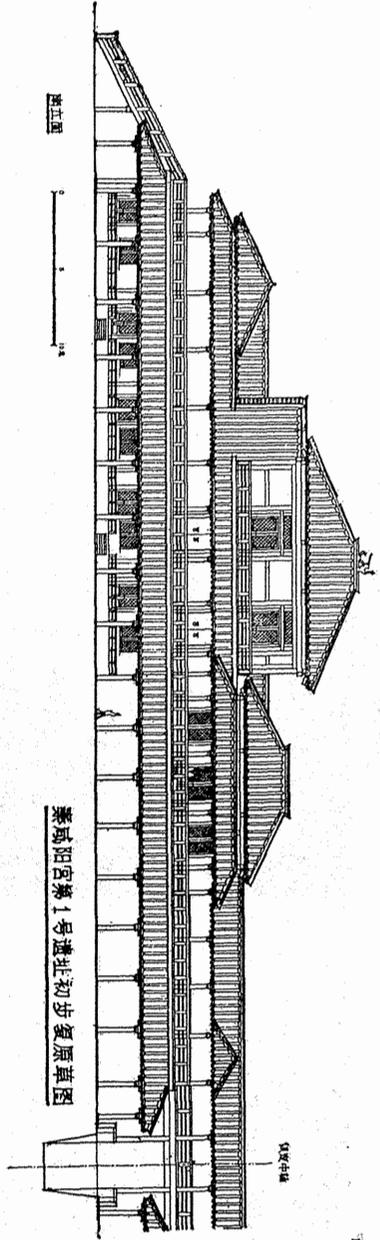
(6) 『史記』荊軻伝の結びに魯句踐の言葉が採られている。以下、書き下し文にて示す。

魯句踐、已に荊軻の秦王を刺さんとせしを聞き、私かに曰く、「ああ惜しいかな、彼が刺剣の術を講ぜざりしや」と。

(静岡県立浜松南高校)



樂城陽宮第一號遺址初復原透視圖

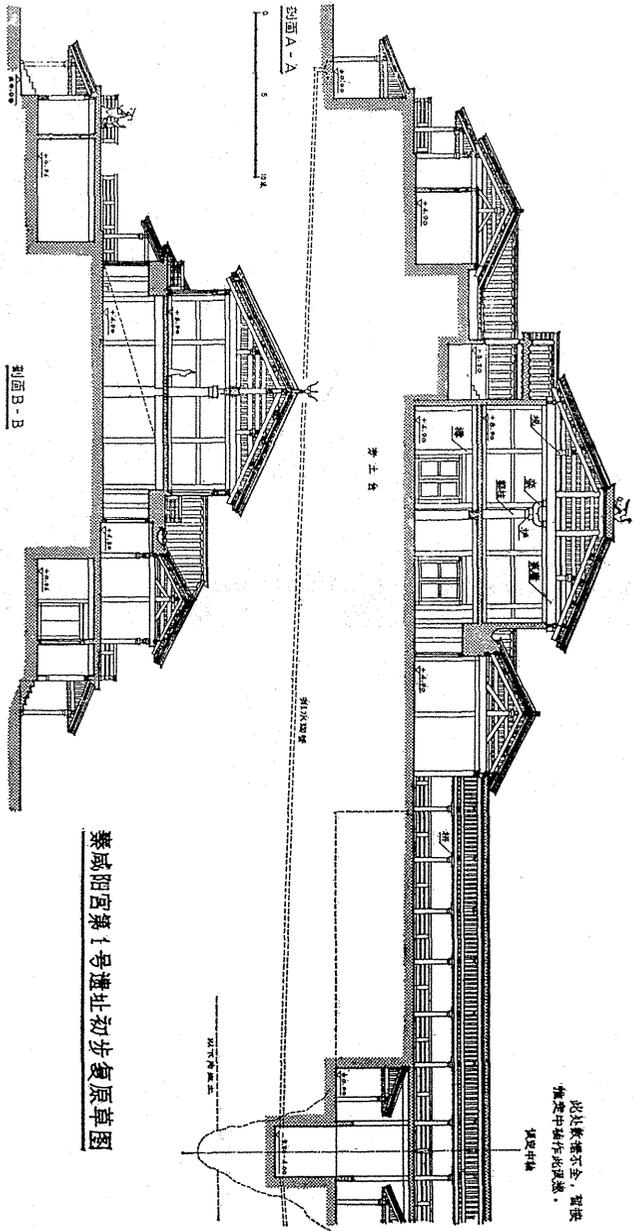


樂城陽宮第一號遺址初步復原草圖

1976年

〈图 1〉

(26)



秦咸阳宫第一号遗址初步复原草图

图一 秦咸阳宫第一号遗址复原图（上）横（下）剖面图

<图 2>

(27)

以^⑭次進^⑮至^⑯陛^⑰秦舞陽色^⑱變^⑲振恐^⑳群臣怪^㉑之^㉒荆
 軻顧笑^㉓舞陽前謝曰^㉔「北蕃^㉕蛮夷^㉖之鄙人^㉗未^㉘嘗^㉙
 見^㉚天子^㉛故振懼^㉜願^㉝大王少^㉞假^㉟借^㊱之^㊲使^㊳得^㊴畢^㊵使^㊶
 於前^㊷秦王謂^㊸軻曰^㊹「取^㊺舞陽^㊻
 所^㊼持^㊽地^㊾圖^㊿軻既^㊽取^㊾圖^㊿奏^㊽之^㊾
 秦王^㊽發^㊾圖^㊿窮^㊽而^㊾首^㊿見^㊽
 因^㊽左^㊾手^㊿把^㊽秦王之袖^㊿而^㊾右^㊿
 手^㊽持^㊾二^㊿首^㊿搃^㊽之^㊾未^㊽至^㊾身^㊿秦
 王驚^㊽自^㊾引^㊿而^㊾起^㊿袖^㊽絕^㊾拔^㊿劍^㊽
 劍^㊽長^㊾操^㊿其^㊽室^㊿時^㊽惶^㊾急^㊿劍^㊽堅^㊿
 故^㊽不^㊾可^㊿立^㊿拔^㊿荆軻^㊽逐^㊾秦王^㊿



秦王に迫る荆軻 (『金石索』)

⑲ 操^ニ其^ノ室^ヲ 刀のさやを握る。
 ㉒ 惶急^ニ あわてる。うろたえる。

⑰ 北蕃^ニ蛮夷^ノ之^ノ鄙人^ト 北方未開の地の野人。
 ⑱ 振懼^ニ 震え恐れる。
 ⑲ 假借^ニ 許す。見逃す。
 ㉒ 畢^ニ使^テ於^テ前^ニ 御前で使者の役目を果たす。

⑭ 以^テ次^ニ 正・副の順序に従つて。
 ⑮ 陛^ニ 玉座の前の階段。
 ⑱ 色^ニ 顔色。
 ★「色^ニ變^ス振恐^ス」とあるが、それはなぜか。